

小樽に港ができたのはなぜ？

江戸時代、蝦夷地はニシン漁で栄えていました。ニシンは肥料として、おもに西日本で使われ、大坂（現・大阪）から北前船が日本海を回って商売をしていました。明治になると、北前船は小樽にも来はじめ、開拓に必要な人や物を運び入れ、道内の生産物を運び出す重要な港になりました。



◆小樽港から石炭はどこへ運ばれていたの？
 1869（明治2）年、小樽に手宮海官所（税関、海上保安、海運局など港湾に関する役場）ができ、商港としての歩みをはじめました。1882（明治15）年、手宮（小樽）〜幌内（三笠）間に鉄道ができると、小樽港は、空知の石炭や農作物を積み出す港として発展していきました。小樽から運ばれた石炭は、全国各地で近代化に使われ、蒸気機関車や機械を動かす重要なエネルギーとして日本の発展を支えたのです。



明治13年、幌内鉄道の試運転の風景。弁慶号が入船陸橋を走っている（小樽市総合博物館所蔵）

◆小樽に防波堤ができたのは？

小樽港をより安全にするためには、風や波から船を守る防波堤が必要でした。その建築をまかされたのが、札幌農学校（いまの北海道大学）を卒業し、アメリカやドイツで土木技術を学んだ廣井勇です。廣井は、冬の高波にもたえられないコンクリートの試験をくりかえし、1897（明治30）年から11年もかけて、全長1289mの「北防波堤」を完成。日本初のコンクリート製外洋防波堤で、110年以上たったいまも使われています。

◆国際貿易港として栄えはじめたのは？

その後、南防波堤と島防波堤の新築、北防波堤をのぼす工事など、最新技術により整備された小樽港は、国際的な貿易港として発展していきます。大正〜昭和初期には、ヨーロッパ、南樺太、中国北東部との貿易も盛んになっていきました。



昭和初期の色内銀行街（小樽市総合博物館所蔵）

もっと知りたい！「港湾一博物館・資料コーナー」

明治時代のまち並みを再現した「小樽市総合博物館運河館」

明治時代に建てられた石造りの倉庫を利用した運河館。館内には、明治時代の小樽のまち並みを再現し、小樽の歴史や自然に関する資料が展示されています。

小樽市色内2丁目1-20 TEL: 0134-22-1258



小樽港の歴史を学べる

「小樽港湾事務所みなとの資料コーナー」

小樽港建設の歴史をふりかえる貴重な資料、写真、模型などを展示しています。また、建設に関わった人たちの知恵や努力をビデオ上映で伝えています

小樽市築港2-2 TEL: 0134-22-6131

